

禁断溺愛

プロローグ

エレベーターに乗り込むと、椎名真尋はほっと息を吐いた。

このマンションのエレベーターはこぢんまりしているからか、妙に安心して気が抜けてしまう。一日の仕事の疲れも重なって、人気がない静かで狭い空間がなんとも心地いい。

これは、一人暮らしを始めて気づいたことのひとつだ。

そしてエレベーターを降りて、自分の部屋に入るとさらに安堵する。

1LDKの自分だけの小さなお城は、今の真尋の身の丈にあった広さだ。

駅からは少し距離があるけれど、今年就職した総合病院には近い。同じ病院に勤める職員の入居が多いのも頷ける。

玄関から直接部屋の中が見えないところ、リビングダイニングに隣接して三畳程のベッドルームが別にあるところが真尋のお気に入りポイントだった。

これまで暮らしていた自宅の部屋より明らかに狭くても、これが本来の自分に合っているのだと自覚できる。

テーブルにバッグを置くと同時にスマホが震えて、真尋は画面を見ながらカーテンを閉めた。

メッセージを確認したのと、エントランスに來客があったことを知らせるインターホンが鳴ったのは同時。

——『巧くんが帰ってきました。そちらに向かっています。事情はきちんと自分から説明しなさい』

母からのそっけないメッセージを噛み締めながら、真尋はおそろおそろインターホンの画面をのぞく。

巧がそろそろ海外赴任から帰ってくるかもしれないとは聞いていた。帰ってきたら怒られるかもしれないとも覚悟していた。

だから、もし帰ってきたらすぐに教えてと母に念押ししていたのに。

「帰ってきたのって……いつ？ 連絡するならもっと早くしてよ、お母さん！」

新しい住所を内緒にするのは難しいだろうから、せめてその時は悪あがきでも身を隠して時間稼ぎしようと思っていたのに。

ピンポン、ピンポン、ピンポンと激しく鳴り続けるインターホンの音に、真尋は観念して通話ボタンを押した。

「……は、い」

『真尋！ いるのはわかってる。さっさと開ける！』

久しぶりの命令口調に「ああ、巧くんだ……」なんて思ってしまう。

そして、その命令に真尋はいつも逆らえない。

いや、いつも逆らっているのに、結局は応じてしまう。

真尋は、はあっとため息をついてから、覚悟を決めて解錠ボタンを押した。

できれば玄関先で追い返したい。でもそんな希望が叶うわけがない。こんな様子の巧から逃れるのは不可能だ。

だから、部屋の前のインターホンを連打される前に、真尋はドアを開けて巧が来るのを待っていた。

エレベーターを降りて廊下を歩いてくる姿は、今にも人を殴りそうな勢いがある。

「巧くん、おかえりなさい」

と言った。

玄関内に入るなり、だんつと壁に手をつかれて巧に見下ろされる。

真尋は「わお、リアル壁ドンだ」と思いつつ、笑みを崩さなかった。表情を作ることに関してはお手の物。お嬢様学校に通い始めてから身に付けたスキルは今でも生かされている。

——巧に会うのは一年ぶり。

二年前に海外赴任してからも、最初の年は盆や正月などに何度か帰ってきていたのに、ここ一年はまったくなかった。

おかげで巧に邪魔されることなく、真尋はこうして一人暮らしという偉業を成し遂げることが

きた。

「俺はなにも聞いてない」

「言っていないもん」

髪型が少し変わった。しかし相変わらず見た目だけはいい。

こうしてスーツ姿の巧を見ると、やっぱりイケメン御曹司だなと思う。

俺様なのにどこことなく品があつて、カリスマ的オーラがあつて。

誰をも従える声と、揺るぎのない強気な眼差しと、圧倒的な存在感。

それは、初めて見かけた時から変わらない。

初めて会った時から変わらない。

むしろ年を重ねることにパワーアップしている。

「一人暮らしを許した覚えはない。就職先だつて……なんでうちの系列病院じゃない！ スマホだつて繋がらない！ なによりっ——」

いつも理路整然としているのに……動揺していると、一番言いたいことを最後にもってくる癖は相変わらず。

「なんで勝手に養子縁組を解消した!!」

「勝手じゃないよ。お義父さんたちからは了解を得た。就職先は、今の病院から最初に採用通知がきたから選んだだけ。就職したら自活するのは当然だから一人暮らしを始めた。スマホを新しくしたのは——」

巧から目をそらさずによくと思ったのに、うまくいかなくて真尋は視線を落とした。

「養子縁組を解消して、名字が湯浅から椎名に戻ったから」

「ふざけるな!」

どんとどたたび壁を叩かれて、真尋は小さく首をすくめた。

(ふざけてなんかないよ、巧くん。だつてずっと決めていたことだから)

「今は湯浅真尋じゃなくて椎名真尋なの、巧くん。私と巧くんは義兄妹じゃない。赤の他人だよ」

真尋は口元だけはなんとか笑みの形をつくった。けれど、怯えとうしろめたさは隠せない。

「ふうん。赤の他人……」

嘲りをともしなつた冷たい声に、真尋はびくりと肩を揺らす。

火に油を注いだ自覚はある。巧の顔を見ずとも、怒りが増したのがわかった。

すると、不意に髪を掴まれた。

看護師として働くからには清潔感が必要だ。だから真尋の髪は肩につかない長さをキープしている。ふわふわのくせっ毛はまとまりが悪いけれど、伸ばすよりはいい。

「痛いっ」

軽く髪をひっぱられて、本当は痛みなんか無いのに、つい口にした。

長かった頃はよく巧に触られていた。それもあって短いままをキープしていたのに、こんなふうにされたんじゃない意味がない。

「赤の他人ね。なら、もう俺が遠慮する必要はないな」

いつ彼が遠慮したことがあっただろうか？ いったって傍若無人だったのに。そう真尋が思ったのと、髪を掴んだままの巧の手が真尋の頬を包むのが同時で。反射的に撥ねのけようとした手まで捕らえられ、真尋の唇は巧によって塞がれた。遠慮なんかしないと云った通り、巧は強引に真尋の唇に割り込んでくる。まさかこんなに早く行動を起こされるなんて思ってもいなかったのと、想像以上の彼の怒りに真尋は抵抗もできない。

（嘘！ なんで！ せつかく赤の他人になったのに。もう関わらないって決めたのに！）唇の感触が意外にもやわらかいと知ったのは、巧が日本を発つ直前。

頭を撫でる。腰に腕を回す。肩を抱く。時には抱き寄せて、頬にも触れる。

そして髪を一房掴んでは、唇を落とす。

そんなスキンシップは、それ以前もいくらでもあった。

家族で行うには近すぎて、でも兄妹だからと言い訳して許してきた距離。

けれどあの別れの日まで、それ以上距離を縮めるような行為は一切なかったのに。

今、真尋の口内には巧の舌が伸ばされて、そして忙しく暴れ回っている。

あの時の、唇にかすかに触れる程度のキスしか経験のなかった真尋には、今のキスは激しくて淫らでどうしていいのかわからない。

息の仕方も、舌の動かし方も、唾液の行方をどうすればいいのかも。

（……今まで、絶対にしなかったのに！ なんてっ）

怒りとともに想いをぶつけられているかのような強引な口づけ。

それなのに、そこからなにかが伝わってくる気がする。

そんなものは気のせいだと思いたいのに、次第にキスは激しいものから優しいものに変化してくから。

「ま、ひる……」

そして聞いたこともない、声音で名前を呼ぶから。

いつのまにか無意識に目を閉じていた。

唇が離れて、ゆっくり目を開けると視界はぼやけていて、涙で滲んだ目に映るのはやるせなく、どこか泣きそうな巧の表情。

「おまえ……卑怯だろうが！」

卑怯なことをしたのは巧のほうだ。

この男はいつだって勝手に強引に真尋の心を暴いてしまう。

真尋の涙を拭う指がためらうように伸ばされたあと、ゆるやかに体を抱き寄せてくる。

「俺は言っただけだ。余計なことは考えずに俺の帰りを待っているって」

そう確かに彼は言った。

忘れたいのに見える。

見送りに行った空港で、出発ロビーの人混み溢れる中、この男はそう命令して真尋にキスをした。一瞬、唇の表面に触れるだけのささやかな接触。

忘れたいのに忘れられない、それは初めてのキス。

「真尋。余計なことは考えるな。おまえは俺のことだけ考えていればいい」

「……そんなのつ、無理」

「無理じゃない。おまえの頭の中を俺でいっぱいにするのなんて本当は簡単なんだ。無理やりそうされたくないなら、自分の意志で俺のことを考えている」

「横暴！ 俺様！ だから、だから——こんなお兄ちゃん、いらなかったのに!!」

初めて会った時から、義理の兄妹になるかもしれないと知った時からずっとそう思っていた。

この男の義理の妹になるなんて嫌だ、と。

この男が義理の兄になるなんて嫌だ、と。

こうして戸籍上、赤の他人に戻ったとしても、自分たちが義理の兄妹だった時間が確かにあって、その事実は決して消えない。

「おまえが俺の妹だったことなんて一度もない」

幾度となく言い続けた言葉を、今もまた巧は繰り返す。

『おまえは妹じゃない』

『妹にはしない』

いつまでも妹だと認めたくないのなら、それでも構わないと思っていた。

けれど、その言葉の奥に秘められたものに気づいたのはいつだっただろう。

触れられるのに戸惑いを覚えて、それから髪は伸ばせなくなった。

「おまえを妹だと思ったことは一度もない」

「私だって……ない！ 兄だと思ったことなんて、思えたことなんて一度もなかった。だって、お兄ちゃんって呼んだことなかったもの！」

『兄と呼ぶな』

そう言われた時から、真尋は巧のことを『お兄ちゃん』と呼んだことはない。

呼べばよかった。

今なら、そう思う。

呼んでいればきつと、互いにこんな感情を抱かずに済んだ。

義理の兄妹が抱くべきではない——こんな想いなど。

第一章 義理の兄妹

(うわ、やっぱり本物だった……)

中学三年生だった真尋は、母の結婚相手の家族との初顔合わせで、自分のささやかな希望が打ち砕かれたのを知った。

母に『会わせたい人がいるの』と言われて相手の名前を聞かされた時から、嫌な予感はしていたのだ。

母のお相手は湯浅製薬社長の湯浅仁。

湯浅系列の総合病院で看護師として働いていた母と仁との出会いは、彼の父親の入院がきっかけだった。

当時、湯浅製薬会長だった仁の父親の担当看護師が真尋の母だったのだ。

患者の担当看護師と、患者の息子である御曹司との恋。

二人とも子持ちだが独身で、表向きは問題がなかったはずなのに、周囲の視線は冷たかった。

病院関係者からは『うまく玉の輿にのつて』だの『仕事を利用して相手を掴まえた』だのと噂され、仁の関係者からは『お金目当て』だの『看護師が相手なんて釣り合わない』だの散々悪口を言われた。

娘としては母がようやく掴んだ幸せを応援したい気持ちもあったけれど、周囲の騒音に辟易もしていた。

だから、本音を言う今回結婚話には反対だった。

けれど母はあつけらかんと『周りの言うことなんか気にすることないわ』と軽くあしらい、仁は『僕がもてる力すべてを使って君のお母さんを守るよ』なんて言った。

雑音さえも恋のスパイスにしてしまう二人のラブラブぶりに、結局真尋は反対するのも無駄だと思きらめたのだ。

なにより、周囲の声を蹴散らして二人の結婚を後押ししたのは、退院した仁の父親だった。

入院が長期に及んだため会長職を辞し、退院後は都会から離れた別荘地で療養を兼ねて暮らして

いるものの、その権力は健在。だからこうして家族同士の顔合わせが実現した。歴史と趣のある料亭で、真尋は父親になるかもしれない湯浅仁と、その息子である湯浅巧と向かい合って座っていた。

畳敷きの個室にもかかわらず、テーブル席がセッティングされていて、長時間の正座地獄は免れた。一品ずつ運ばれてくる料理は、季節の食材が見た目も華やかに盛り付けられ、味わいも上品だった。

様々な産地の器も、見るからに高級。おいしい食事に舌鼓を打ちながら、軽く自己紹介をして当たり障りのない話題を繰り広げる。真尋は、そっと向かいに座る巧を見た。

真尋より三つ上の高校三年生。サラサラの黒髪に整った顔立ち。均整のとれた肢体は、スーツに包まれている。また学生なので着慣れていないだろうに浮いた感じはなく、むしろ品よく着こなしていた。

にこやかな笑みを浮かべることはないものの、穏やかな声で淡々と話す。スポーツ万能で、イケメンで御曹司——都内屈指の偏差値を誇る男子校でトップレベルの成績を収め、早々に推薦で難関大学への進学も決めたらしいという噂。

この男のことを真尋は知っていた。

なぜなら、巧の通う男子校と、真尋の通う公立中学校は近い場所にあるからだ。巧の通っているところは、昔から偏差値が高いことで有名な高校ではあったが、頭はいいけど面白くない真面目な男子生徒ばかり、というのが近隣の評判だった。

それがここ数年で変化した。湯浅巧が入学すると、掃き溜めに鶴のような彼の存在はとにかく目立った。

さらに類は友を呼ぶのか、彼の周囲の男子生徒たちはだんだん垢抜けてきて、偏差値が高いだけの男から、容姿もいい男へとシフトチェンジしていった。

そうやって注目され始めると、実は大会社の御曹司だとか、医者や弁護士の子どもだとかいうことも明らかにになっていく（昔は誰も関心がなかったもので、そんな噂も流れなかった）。

通学途中で会う、頭も容姿もいい男子高校生など、恋にはしゃぐ女子中学生にとっては憧れの的だ。

よって、湯浅製菓の御曹司である湯浅巧の名前を知らない女の子なんて真尋の中学にはいない。けれど真尋は、まるでアイドルのように騒がれていた彼の存在と名前は知っていても、一切興味などなかった。

『まあ見た目がいいのは確かだなあ』と思いつつ、周囲の女の子のはしゃぐ様を傍観していただけだ。

それが変わったのは、ありきたりなシチュエーションで真尋の友人が巧に恋をしたからだ。雨降りの道端で足を滑らせて、派手に転んで荷物をぶちまけ、膝を痛めて恥ずかしい思いをして

いた友人に、手を差しのべたのが巧だった。

汚れた荷物を拾い、アイロンのかかった綺麗なハンカチを友人の膝にあてながら『大丈夫か？』と声をかけられた瞬間、彼女は簡単に恋に落ちてしまったらしい。

友人は、表立って騒いだり、ファンクラブに入ったりはしなかったけれど、遠くからひっそりと相手を想う——ある意味、真剣な片想いに突入してしまった。

おかげで友人がハンカチを返す時も、周囲に混じってバレンタインチョコを渡す時も、『エネルギーが欲しいの！』と言って巧の姿を一目見たいと高校の近くで待ち伏せする時にも、真尋は付き添う羽目になった。

高校の学園祭や体育祭にも一緒についていった。

仕方なく、友人と一緒に湯浅巧を見つめてきたのだ。

（この人が……私の義理の兄になるの……？）

結婚が決まれば、片想いをしている友人がなにを思うのか、それを想像するだけでも頭が痛い。（いや、大丈夫。結婚が決まってもお嫁に行くのはお母さんだけ）

真尋は冷静に自分に言い聞かせる。

真尋の家は母子家庭だが、母の実家で祖父母と母の弟である叔父と同居している。祖父は今まで現役で働いているし、叔父は独身だけれど医師をしていて経済的な心配はない。

真尋も春からは高校生だし、母親と一緒に暮らさなくても平気な年齢だ。

元々母は仕事で留守がちであったし、家のことは真尋も祖母と一緒に積極的にやってきた。母と

生活を共にしなくても、なんの不自由もない。

だから母だけが湯浅家に嫁げばいい。そう考えていた。

(もし、結婚が決まったら……お母さんだけお嫁さんについてね、って言うおう)

目の前の男と義理の兄妹になるなんて、真尋にとつては嫌がらせのようなものだ。

真尋は心の中で作戦を練りつつ、にこやかな表情で、おいしいはずの料理を口に運び続けた。

一通り食事を終えたあと、真尋はお手洗いに立った。

畳敷きの廊下を歩いていくと、トイレまでもが和の風情で感心する。白い陶器の洗面ボウルで手を洗い終えると、真尋はあと少しの我慢だと気合いを入れてそこを出た。

瞬間、目の前にあまり顔を合わせたくない人物の姿があった。

色鮮やかな絵が描かれた大きな花器のそばに立ち尽くす男は、華やかに活けられた季節の花々に負けない存在感を放っている。

男性の洗面室は廊下の反対側だったはずだ。もしかしてこの男は、真尋が出てくるのを待っているのだろうか。

だからといって「なにか御用ですか？」と声をかける気にもならなくて、軽く会釈して通り過ぎることにする。

「さつき、高校は家の近くの公立を受験するって言っていたな」

真尋は仕方なく歩みを止めた。

確かにさつき、そんな話題になった。

高校はどこへ行くつもりかと仁に聞かれて、『家から近い公立高校に進学するつもりだ』と答えた。仁はそれを聞いて、ほんの少し訝しげに首をかしげていたので、真尋の真意に気づいたのかもしれない。

真尋が今住んでいる家から近い公立高校は、偏差値はほどほどだけれど、同じ中学からの進学者も多い。勉強も遊びも適度に楽しめて、真尋の成績でも充分に進学可能な高校だ。

「高校は、皇華にしろ」

「は？」

「おまえが皇華に進学して湯浅の娘として恥じない教養を身につけるなら、俺の父親とおまえの母親との結婚を認めてやってもいい」

真尋は巧をじっと見つめた。

これまでも友人と一緒に遠くからは何度も見かけていたけれど、直接口をきいたのは今夜が初めてだ。

イケメンで、スペックがやたら高く、さらに御曹司とくれば、真尋の友人をはじめ他の同級生にとつても理想の王子様と言えるだろう。

けれど、他者からのそんな評価を自覚しているこの男は、真尋にとつてはただのいけ好かない俺様御曹司でしかない。

彼の父親と真尋の母親が結婚すれば、この男と真尋は義理の兄妹になる。

(やっぱり……こんなお兄ちゃん欲しくない……)

初対面なのに上から目線で、いきなり命令口調で声をかけてくる男なんて。

『子どもたちが反対するならば結婚はやめる』。それが相手の家族との顔合わせが決まった時に母から言われた言葉だ。

「あなたが反対なら反対で構いません。私はどちらでもいいけど、私かあなたが反対すれば結婚がないことは知っています。なので、この結婚はあなたの反対でダメになるってことでもいいですか？」

「おまえ……母親の幸せを願わないのか？」

巧は目を瞠あはつて、呆あはれを含んだ口調で問うてくる。

「母親の幸せを願うからこそ、相手のご家族に反対されるのならやめたほうがいいと思っています。それに私も……お金目当てだとか、いきなりお嬢様らしくしろとか言われるのも面倒だし、なによ

り——」

『あなたと義兄妹になるのは嫌だ』。そう続けようとして、さすがにやめた。

そんな本音を晒さらす必要はないし、それで反感を買うのも馬鹿らしい。

「なにより、なんだ」

「いえ、なんでもありません……」

「俺のせいで結婚できないなんて言われるのはごめんだ。結婚は認めてやる。そのかわりおまえは絶対に皇華に進学しろ！ 他の学校は許さない」

皇華——つまり皇華女学園。

なんとも御大層ごたいそうな名前を持つこの学園は、私立の中高一貫のお嬢様学校だ。高等部の制服は清楚でかわいらしいため、特に人気がある。

(女子校、それもお嬢様学校ねえ)

真尋は特に進学したい高校があるわけではないし、こだわりもない。

今の成績で行ける範囲で、できるだけ家から通いやすく、さらに知り合いも多そうだから公立でいいやと思っただけだ。

だから、進学先を皇華にすることで結婚を認めてもらえるなら構わないし、それで湯浅の親族の不満が解消されるのならお安い御用だ。

母親の幸せを願わない娘なんていない。

「……ま、べつに皇華に行くのは構いませんけど、入試に受かるかどうかは別ですよ」

考えたこともなかったので詳しい校風や偏差値さえ知らない。聞いたことがあるのは、お嬢様学校独特の変った校則が多いという噂くらいだ。

受かるとは限らないとあえて言うことで、真尋は自分の逃げ道を確保した。

「大丈夫だ。必要なら俺が教える」

「では、結婚は認めていただけるといふことで」

「ああ」

「ええと、よろしくお願いします、お兄さん？」

軽い気持ちで口にしたただけだったのに、巧は驚いたように目を見開いたあと、ものすごく嫌そう

に眉根を寄せた。

「俺を兄と呼ぶな。おまえを妹だと認めるのはまた別だ」

真尋は目を細めて、この男面倒だなあと思った。

中学生の娘と高校生の息子、思春期真つ盛りの子どもを持つ親同士の結婚はデリケートな問題だ。もう少し互いが幼ければ、新しい家族が増えることを純粹に喜べたのかもしれない。

そして、目の前のやたら見目のいい男を兄と呼べるのも嬉しかったかもしれない。

でも真尋は一切そんな期待はしていなかった。兄と呼ぶと言われても傷つきはしない。むしろ、いつまでもどこまでも他人でいたいものだ。

「では、なんとお呼びすれば？」

「名前で」

「名前？」

「巧でいい」

「巧、さん？」

「……さんはやめる」

「……巧くん？」

「それでいい」

真尋は『本当にこの男面倒、面倒、面倒！』と心の中で何度も唱えた。

以前からなんとなく、面倒そうな男だとは思っていたけれど、やはり真尋の予想は大的中だ。

「では、よろしくお願います」

それでも真尋はそんな心の声はおくびにも出さず、笑みさえ浮かべて頭を下げた。

巧と一緒に部屋に戻るの嫌で、真尋は少し遅れて行くことにした。

近所の公立高校であれば歩いて通えたのに、皇華に通うとなると電車通学になるのだろうか。そんなことをつらつら考えながら部屋に入ると、早速真尋の進学先について話し合いが行われていた。母は困惑したような表情で「真尋、皇華に進学するの？」と聞いてくる。

それはそうだろう。

今まで真尋の口から、皇華の『こ』の字さえ出てきたことなどない。

巧が結婚の条件に提示してきたからなんて、さすがに言えるはずもなく「さつき薦められて……まあ検討するぐらいなら」と言いつつ巧を見れば、彼は素知らぬ顔でデザートようかんの羊羹を口に運んでいた。

なんとなく先手を打たれた気がする。

「皇華の大学部には興味があったし……高等部から進学する選択肢もあるかなって思って。それに湯浅家の女子は皇華に通うのが基本だって言われたから」

ちよつとでも仕返しになればと、あえて巧をちらりと見る。

すると、仁はなんとなく状況を読んだようで、

「巧の言う通り……うちは女の子であれば皇華進学を薦める。かといって無理に行く必要はないん

だ。真尋ちゃんは進学先を皇華に変更していいの？ 巧の言うことは気にしなくていいんだよ」と優しく言ってくれた。

息子とは違って、やはりこの人なら母を任せても大丈夫だと真尋は思う。ここで正直に、巧から結婚の条件だと言われたからと暴露して、二人の結婚話を混乱させるのは本意ではない。

それに実際、皇華の大学部には興味があったのだ。

数年前に「看護科」が新設されて、そこには国際的に活躍する看護師を育成するコースができた。さらに他学部には「医療通訳」に関する授業があったり、必要単位を取得すれば「院内学級の先生」を目指すこともできるらしい。

進路選択に対して、柔軟に対応していると評判がいいのだ。

真尋は母と同じ看護師にも関心があったので、質の良い教育を受けられる皇華の看護科には憧れも抱いていた。

途中で「医療通訳」や「院内学級の先生」などに進路変更したとしても、融通が利きそうなのころも魅力だったのだ。

巧には絶対言わないけど。

「皇華に行くのは……構いません」

真尋の返事に、仁はにっこりとほほ笑む。

「そうか。真尋ちゃんが皇華に進学してくれるなんて嬉しいな。だったら、やつぱりうちと一緒に

暮らそう。皇華なら高等部も大学部もうちから通うほうが近い」

真尋は話の矛先が妙な方向に進んだことに気づいた。

「あ、あの！」

「僕たちが結婚しても、真尋ちゃんは同居する気はない。それについては僕も千遥さんから聞いてるよ」

結婚話が浮上した時から、真尋はずっと母にそう匂わせていた。

結婚には賛成する。でも結婚するのは母であって、自分ではない。

だから真尋は、祖父母の家に残って生活するつもりだと伝えてきた。

『もうすぐ、高校生になるから大丈夫』

『高齢になった祖父母が心配』

『お母さんは新婚生活を楽しんで』

『高校だつてこつちのほうが通いやすいし』

など、曖昧な表情をする母親に構わず「結婚相手と私は同居しなくていいよね？」と暗に伝えてきたのだ。

「結婚するのに母親だけがうちにきて、娘はこないなんて、そんな体裁の悪いこと考えていたのか？」

呆れの中に、ほんの少し見下したような気配をまげた口調に、真尋はその言葉の主である男を見た。

(体裁が悪い……?)

湯浅家との結婚話が浮上してから、何度となく悪意にさらされてきた。仁はいい人だと思し、母の選んだ相手だからと何度も言い聞かせた。けれど、湯浅一族という背景は真尋にとっては厄介でしかない。

「巧！」

「そうだろう？ 父さん。結婚したのに娘と一緒に暮らさないなんて、たとえ本人が望んだことでも、周囲はそうは見ない。父さんとの結婚のために娘を捨てたって言われる可能性だってある」なんて悪意に満ちたものの見方なんだろう、と真尋は思わずにはいられなかった。

だが、現実には巧の言う通りだ。

二人が愛し合って結婚するのは確かなのに、真尋の母は「お金目当て」だと陰口を叩かれている。「そんなつもりは……私はただ、おじいちゃんたちのことが心配だし、お母さんと一緒に暮らさなくても家族であるのは変わりないし、高校だって……」

近いし、と言いかけて『あ、皇華目指すって言っちゃったあとじゃん』と思いつく。

巧の出した条件は『皇華に進学する』ということだけのはずだったのに、なぜか真尋にとって嫌な展開になっている。

「叔父さんが同居していると聞いている。だから祖父母を心配する必要はない。家族になるなら一緒に暮らすべきだし、中学を卒業したばかりの娘と離れるなんて千遥さんも望んでいないはずだ。高校は皇華に行くんだろう？ だったら、うちから通うのがいい」

淡々と巧に言い返されて、真尋は口を噤むしかなかった。

湯浅家となんか関わりたくない。面倒すぎて嫌気がさす。

なにより一番、この目の前の男と関わりたくない。

(言っちゃいけない、言っちゃいけないかもしれないけど……)

「そ、それに！ 血の繋がりもない年の近い異性と一緒に暮らすのは抵抗があるもの！」

母が、真尋との別居に仕方がないと応じていたのは、そこに一番説得力があったせいだ。

高校生と中学生の男女。

年頃の二人と一緒に暮らすなんて、それこそ周囲がどんな穿った目で見てくるか。

名家の湯浅家だって、そんな風評被害を受けたくないはずだ。

「それは、俺がおまえに手を出すかもしれない、そう言いたいのか？」

真尋は一瞬怯む。

(え？ なんでそうとるの?)

なぜか巧は、いつも真尋の想定外のことを言い出してくる。

「同居すれば、俺が女子中学生に手を出す？ そんな節操のない男だと言いたいのか？」

巧は冷めた目で真尋を見ながら、さらに畳みかけてきた。

「中学生を相手にするほど困っている？」

「そ、そんなこと、言っていない……」

「じゃあ、同居するのに問題なんかない。おまえが自意識過剰にならなきゃいいだけだ」

問題ありまくりだ。

親が結婚して名字が変わるぐらいよくある話である。

でも義兄妹になる相手が湯浅巧だと問題しかない。

この男はとにかく有名人なのだ。友人の片想いの相手でもある。

同居するなんて知られたらどんな目に遭うか、想像するのも面倒だ。

「真尋ちゃん。結婚にあたって君がいろいろ不安を抱えているのはわかる。でもこれからは家族になるんだ。僕としてはせっかくできたかわいい娘と、できれば一緒に生活したいと思っっているんだけど。僕の願いを叶えてもらえないかな？」

冷やかな巧とは対照的な仁の頼みに、真尋は拒む術を持たなかった。

* * *

顔合わせから数か月後、二人はひとまず入籍を済ませた。そして真尋の高校合格後、ごく親しい人ただけでささやかな結婚式を挙げた。親族へのお披露目パーティーはまた別に設けるらしい。

そして真尋の中学卒業と同時に、湯浅家へと引っ越してきた。

双方の子どもたちの了承を得られるとすぐに、仁は自宅を大々的にリフォームした。

洋風建築だった建物は、モダンな家に生まれ変わり、両親の部屋は一階に、子どもたちの個室は二階に配置されて、さらに各個室に専用のバスルームや洗面室が備えつけられた。

顔合わせ時の真尋の発言を考慮したのか、年頃の子どもたちの同居への配慮からか、プライバシーが守られる空間づくりをしてくれたのだ。

個室には鍵がつけられ、巧と真尋の部屋は階段脇の共用スペースを境に左右に分けられている。

一階にもリビングダイニングがあるが、そちらは家族全員で過ごすスペース。

二階の共用スペースが第二のプライベートリビングのような形になっており、そこにもソファやテレビが設置されている。

上下階に分かれた二世帯住宅のような作りになっていた。

元々巧が自分にどうこうする心配などしていなかったが、それでもプライバシーを確保できるとに感謝した。

おかげで一緒に生活し始めてからも適度な距離が保たれていて、思ったよりも同居生活はスムーズに進んでいる。

そして今日、真尋は皇華の入学式を迎える。

入籍後も中学卒業までは旧姓で通していたので、これから新しい名字を名乗る生活が始まるのだ。

湯浅真尋——と、何度も頭の中で繰り返しながら、真尋は制服に着替えた。

皇華の高等部の制服は、清楚で可憐だと評判だ。

真っ白な丸襟ブラウスに紺色のジャケット。襟元には細い臙脂のリボン。Aラインに広がるスカートは膝が隠れる長さで、裾に白いラインが一本入っている。指定の靴もローファーではなくラウンドトゥのストラップシューズだ。

髪を染めるのとパーマは禁止だけれど、結んでいなければならぬという規則はない。

だから真尋も、脇の下まで伸びた髪をハーフアップにした。毛先にゆるいくせがあるため軽くカールがかつて見える。

鏡で制服姿を確かめたあと、真尋は階段を下りていった。

義父と巧はコーヒーを飲んでいた手をとめて、制服姿の真尋を見る。母は目を細めてほほ笑んでいる。

「真尋……馬子にも衣装だな」

「真尋ちゃん！　かわいい！　元々かわいいけど、皇華の制服はさらにかわいらしさを引き立てている！　さすが千遥ちゃんの娘！」

「真尋、すごく似合っているわよ」

義父も母もカメラ、カメラと叫びながらバタバタと動き始めた。

すると、巧がすつと近づいてきて、真尋の目の前に立った。

一足先に大学の入学式を終えた巧は、ついこの間まで高校生だったとは思えないほど大人びた服装をしている。

制服を着なくなっただけで一気に少年っぽさが消えた。

春休み中に車の免許も取ったらしい。

すつと伸びた手が、真尋の制服のリボンをほどいた。

皇華のリボンは昔ながらの結ぶタイプものだ。

巧は器用に結び直して綺麗な蝶々をつくった。

胸元に触れるわけではないのに、大きな手がすぐそばで動いて真尋は知らず息を止めた。

「髪……染めてないよな」

「染めてない。校則違反だから」

「元々明るめの色なのか……紺色の制服のせいか余計に明るく見える。一筆千遥さんに書いてもらったほうが安全かもな」

「髪の色？」

「そう。皇華は他の学校とは禁止事項がいろいろ違う」

肩に落ちていた真尋の髪に巧が手を伸ばす。背中に優しく流すその仕草に『近い、近いよ！』と心の中で叫ぶものの、表情には一切出さないように耐えた。

一緒に暮らし始めてすぐに敬語は禁止された。

妹だと簡単には認めないみたいなのを言っていた割には、巧の対応は冷たくはない。

いや、むしろ――

こうして制服のリボンを直したり、簡単に髪に触れてきたりする。

こんなに男の子に近づかれたこともなければ髪を触らせたことなんかもない。きつと普通なら手を振り払っているはずだ。

けれど、巧は平然として慣れたように触れるので、振り払えば自分だけが意識しているように思えて、真尋は動けなかった。

(妹だから？ この距離の近さは妹だからなの!?)

「真尋……明日から皇華には俺が大学に行くついでに送るから」

「え？ だって、園部そのべさんは？」

湯浅家にはお手伝いさんも運転手さんもいる。園部は湯浅家お抱えの運転手だ。

皇華には変わったきまりがたくさんあって、通学は車が基本だ。

駅から離れた閑静な場所にあるせいで狭い路地や見通しの悪い道路が多く、生徒の安全確保のため徒歩や自転車通学は禁止されている。学校説明会でも『車送迎ができることは必須条件です』と言われた。

さすがに大学には、そんなきまりはないが。

だから、真尋も園部の運転する車で通えばいいと言われていた。義父の出勤時間と重なる懸念けんねんもあったが、『大丈夫だよ』と言っていたので深く考えなかった。

大丈夫って、もしかしてこういうことだったのだろうか。

「園部さんは父さんを送る。時間をずらせば大丈夫だって最初は言っていたけど、しばらく忙しくて早めに出たらしい。どうせ俺は車で行くし皇華は途中だ。帰りは園部さんが迎えに行くけど、時間帯が合えば俺も行く」

巧に送迎を頼むなんて、できれば遠慮したい。

車通学が原則でなければ丁重ていじゆうにお断りしたいところだ。

だが、車通学は大前提。

「でも、巧くんの負担になるんじゃない……」

遠慮ではなく迷惑なんだけど、という気持ちで言ってみる。

巧は敏感にその意図を感じ取ったくせに、じろりと真尋を睨にらんで譲らない。

「俺がいつて言っている。余計なことを考えるな」

そう言われると真尋はなにも言い返せない。これまでの短い付き合いの中で反論しても無駄なことを真尋は学んでいる。

「……じゃあ、よろしくお願いします」

渋々、小さく頭を下げた。

車通学は楽だと安易に思っていたけれど、こうなると放課後、自由に遊びに行く機会がないのでは？ と思ってしまう。

皇華はそういうことも暗に禁止したかったのかもしれない。

「巧、真尋ちゃん、写真撮ろう！」

「俺の入学式の時は、そんなこと言わなかったくせに」

「息子なんて撮ってもつまらないだろう！ ああ、千遥ちゃん、娘っていいねえ。皇華の制服着た娘を見られるなんて最高だよ！ 真尋ちゃんは、ものすごくかわいいし、制服もすごく似合っているし」

湯浅製薬社長とは思えない発言を繰り返す義父に、真尋は苦笑した。

会社では威厳ある姿なのだろうけれど、ここではかわいいおじさまだ。一緒に暮らし始めてから、

母が義父を選んだ理由がなんとなくわかった。

そうして庭に出て、お手伝いの頼子に写真を撮ってもらった。

義父と母と義兄と一緒に……それは紛れもなく幸せそうな家族の写真だった。

* * *

皇華への朝の送迎を運転手の園部ではなく、巧にしてもらうことになったので、真尋は早目に学校へ行くことにした。

巧は最初『なんでそんなに早くに行くんだ？』と文句を言っていたけれど、一度送迎の渋滞に巻き込まれそうになってからは黙っている。

入学して初めて知ったが、巧の在籍していた高校とこの皇華は提携校で、特に高等部は交流が盛んだっただけだ。

巧は生徒会役員をしていたため、皇華との関わりが多くあり、その存在は校内でも広く知られていたことが発覚した。

もともと早く知っていたら入学を考え直したのに、と思わなくもない。

確かに真尋の中学でも巧は有名だった。

だから、提携校と知ってからはなおさら、湯浅巧の義理の妹になったことを、いつまでも隠し通せるとは思っていなかった。

だからって入学して早々に、動物園のパンダの赤ちゃんのような気分を味わうことになるとは。

初日から『あれが巧さまの義理の妹？』という好奇と嫉妬混じりの視線にさらされたのだ。

巧さま——真尋の中学でも巧は、こっそりそう呼ばれていた。

まさか皇華でも同じように呼ばれているとは思わず、最初は呆れ驚いたけれど。

真尋は『巧さま』人気を侮っていた。

(なんでホームルームが延びた日に限ってお迎えなのよ！)

真尋は、園部からの『今日は巧さんがお迎えに行かれます』というメッセージが入ったスマホを睨みつけた。

朝は巧が送ってくれるが、時間帯が早いので生徒と会うことなどない。

それに帰りの送迎は園部の担当だ。

『巧さまの義理の妹』なんて一度見れば満足するだろうし、嫌な視線もいずれ消えるだろうと思っていたのに、こんな風に時折ふらりと巧が迎えに来るせいでいつまでも収束しない。

巧のお迎えは、あくまでも気まぐれだ。

大学の授業が休講になったとか、園部さんが忙しそうだからだとかで、いきなり園部経由で連絡が来る。

迎えに来るなどとは言えないので、真尋はせめて利用者の少ない第五駐車場で待つようお願いした。

車送迎必須の皇華では、いつも列の連なるロータリー以外にも、広い駐車場が完備されている。

ロータリーの利用は屈指のお嬢さま方優先だが、大半の生徒は昇降口に近い大駐車場を利用する。第五駐車場は校舎から離れているだけでなく、大通りからも遠く道も狭いため利用者が少ない。だから巧が迎えに来るとわかっている日はそこに停めてもらい、速攻で教室を飛び出して、見つからないように努力してきた。

けれど最近『巧さまが義理の妹の送迎をし、第五駐車場を利用しているらしい』という噂が広まり始めたのだ。

お嬢さま方が送迎されている車は大きいので、第五駐車場まで車で進入してくることはないが、わざわざ歩いて寄り道する女子生徒の数は少しずつ増えていった。

ひとえに真尋を迎えに来るかもしれない巧を見るためだ。

そしてホームルームが大幅に延びた今日に限って、巧がすでに迎えに来ている。

巧はきつと、いつもの時間に駐車場で待っているに違いない。

そして、皇華の中でも強者^{つわもの}女子たちは遠慮なく彼のまわりを取り囲んでいることだろう。

案の定、駐車場に近づくにつれて黄色い声が聞こえてきた。

巧は周囲を女子高生に囲まれて、小さな車のそばに立っていた。

これだけ騒がれているのに、巧はあまり愛想がよくない。

群がる女の子たちに笑いかけたりもしないし、話しかけられても無視をする。

それでもなお女の子たちはきやあきやあ言いながら話しかけているが、巧は口を結び睨み^{にら}はしなものの、視線はそらしたままだ。

真尋はその場面を見て、どうしてみんな彼の発する空気を読まないのだろうかため息をついた。

（不機嫌だ、ものすごく不機嫌だ）

この面倒な男の相手をするのは、最終的に真尋になる。

車送迎必須でなければ歩いて帰りたいと切に願いながら、おそるおそる近づいた。

巧は真尋を見つけると、無表情をガラリと変えて、見たこともないような笑顔を向けてきた。

「真尋！」

（誰!? あいつは誰！ 怖い、とにかく怖い！）

爽やか王子^{さわやか}とでも言えそうな笑顔は、周囲の女子生徒たちの頬を薄桃色^{うすももいろ}に染めて、真尋の顔を蒼白^{そうはく}にした。

巧はほほ笑みを張りつけたまま、長い足を優雅に繰り出して近づいてくる。

そうして立ち尽くす真尋の前になると、なんのためらいもなく手を伸ばして真尋の腰を抱く。

「真尋……いつもより遅いから心配した。なにかあったのか？」

もう片方の手は真尋の頬にそえられて、さも心配そうな眼差しを向ける。

「な、なにも？ ホームルームが延びた、だけ、です」

あまりの恐怖に、思わず敬語になってしまう。

よほど長い間、女の子たちに囲まれていたのだろうか。いつも以上に不機嫌さに拍車がかかってくる。

だったら車の中に入ればよかったのに。

それよりも抱きしめているような体勢が、近すぎる顔が、甘ったるい空気を放った。
「よかった。真尋帰ろう」

キラキラした笑みとともに、甘い声が真尋の耳元に届く。

そうして真尋の腰を抱いたまま、女の子たちが茫然と立ち尽くす中を車に向かって歩いていく。
恥ずかしい、恥ずかしいすぎる。

さすがに真尋も、こんなことをされれば無表情ではいられない。

女の子たちの巧へ向ける甘い視線と、自分に向ける冷徹な視線とを受けて、そそくさと車に乗り込んでその場から逃げた。

明日からの学校が怖い。女子の噂は凄まじい。

今日の巧の様子を見て、彼女たちがどんな噂を広めるのか想像もつかない。

真尋はそっと巧の横顔を盗み見た。

女の子たちに囲まれて随分不快そうだったから、怒っているかと思えば、むしろご機嫌に見える。

(え？ なんで？)

それはそれで、あやしい気がして真尋は思わず注視してしまった。

「なんだ？」

「あ、うん。大変だったら無理してお迎えに来なくても……」

最終手段でタクシーという手もあるのだ。

「大変って、なにが？」

「だって、女の子たちに囲まれて大変そうだったじゃない」

「あー、まーうるさかったな」

「嫌だったんじゃないの？」

「んー、嫌だけど、ああいうのは慣れている。まあ、大学生よりはマシだよ。皇華だし節度はあるほうだ」

そうですか、そうですか！ そうですか!!

慣れているとさらりとと言えるあたり、さすがですね！ と心の中で称賛してやった。

「ま、大変になるのはおまえだろう？」

にやりと巧は笑って真尋を見た。

巧が選んだ車は小さなイタリア車だ。ドイツ車に乗ってくるのかと思っていたら、今は小回りが利いて、やんちゃなのがいいと言う。

だから車内は狭く、距離が近い。

「わざと？ さっきの、わざと私に笑顔向けたんでしょ！ なんてっ」

「湯浅巧には義理の妹ができた。彼はできたばかりの妹を溺愛しているらしい。だから特定の恋人は必要ない」

「なに、それ？」

「俺の大学で広まっている噂。女に告白されるのが面倒で、おまえを引き合いに出したら落ち着いた。皇華にも広まれば俺の周囲は安泰だな」

「はあつ？ 犠牲になるのは私じゃない！」

「兄が妹をかわいがってなにが悪い？ 俺はできたばかりの妹に夢中だろう？ 毎日皇華まで車送迎しているんだからな。それに、高校内のいざこざぐらい、おさめられなくてどうする？ どうせこれからも、俺の義理の妹で湯浅令嬢になったってだけで周囲からはいろいろ言われるんだ」

周囲からのあれやこれやは当然、真尋の耳にも入ってくる。

巧は飄々としてるので、気づいていないか無関心なのだと思っていた。

いや、むしろ目立つ行動をして、真尋に嫌がらせでもしたいのかと思っていた。

「その代わり、高校外のすべてのいざこざからは守ってやる」

その言葉で、真尋は自分の中に渦巻いていた不平不満が行き場をなくしたのを感じた。

赤信号で停車すると、巧は真尋をじっと見る。

「俺がおまえを守る」

こくんつと唾液を呑み込んだ。

真尋を見つめる巧の目は、なにかを雄弁に語ろうとしているかに見えた。

それを読み取ることに危機感を覚えて、真尋はさっと目をそらした。

* * *

皇華は中高大の一貫校だ。中等部の募集人員は少なく、高等部で増える。一時期、内部生と高等

部からの外部進学生とはクラスが別だったが、最近では、特別進学クラス以外は一緒になっていた。

出席番号順で前後になったことで、真尋は内部生の矢内結愛と友達になった。

最初は内部生というだけで、お高くとまっているのではないかと警戒していたが、逆にお嬢さま学校の生徒らしくおっとり穏やかな彼女に、真尋はすぐに好感を持った。

むしろ外部進学生のほうが皇華ブランドを鼻にかけているところがある。こそこそと真尋の噂話をするのも外部進学生が多い。

そして今、真尋はいつも結愛と一緒に弁当を広げている裏庭で、陰でいろいろ言っている人たちと初めて直接、対峙していた。

結愛は、内部生の友人に呼び出されたとかで、遅れてここに来ることになっている。もしかしたら彼女たちがそんな裏工作をしたのかもしれない。

中庭には芝生が広がり、屋根のついた東屋にベンチやテーブルが設置されていて、お昼休みには人が溢れている。

しかし、真尋も結愛も多くの人に囲まれるのは苦手なため、あえていつも人気のない裏庭で過ごしていた。

それが仇になったようだ。

「巧さまの妹になったからって、我が物顔でふるまうのはどうかと思うわ」

我が物顔でふるまった覚えなんてないんだけど……と思いつつ、先日、迎えに来た時の巧の態度のせいだと心の中で罵った。

「我が物顔って？」

「そうでしょう？ 本当の妹でもないくせに、巧さまを足として使って、さらに優越感に浸って！
そういう態度を我が物顔って言うのよ！」

こうして女子生徒に囲まれる可能性を考えていたのかどうか知らないけれど、あの時巧が言った言葉を思い出す。

『おまえも、妹だから俺にかわいがられているって堂々と言えがいい。存分に俺の名前を利用しろ』
俺は俺で存分に利用するからな、とつけ加えながら。

真尋はこういう面倒なことが大嫌いだ。

今後もこんな呼び出しはありそうだから、一発目でなんとか決めなければならぬ。

真尋はすつと息を吸うと、ふわつと雰囲気をやわらげた。

「皆様方を不快にさせて申し訳ありません。義兄にはもう送迎をお願いしないことにします。義兄は私をとてかわいがってくれているので、きつと理由を問われると思いますが、その時は皆様に言われたことをお伝えしますね」

「……なっ!!」

「義兄がどれだけ私を溺愛しているかは、先日のお迎えの様子をご覧になった方ならわかると思います。送迎を断る理由を聞けば……義兄はそう進言した方々を許しはしないでしょう。そうそう、私の特技は人の顔を覚えることなんです。学年、クラス、お名前まできちんと義兄には報告いたしますので」

「あなたっ、そんなことしてただで済むと思っているの！」

真尋は口元に笑みを浮かべた。

彼女たちが恐れるのは巧に嫌われることのはずだ。目に力を込めて彼女たちを一人ずつ一瞥した。

「私に手を出せば、義兄が許さない。それだけは覚えておいてください」

彼女たちは顔を紅潮させて、捨て台詞を吐くと身を翻していった。

姿が完全に消えてから、真尋はいたたまれなくて腰を折って座り込む。

ありえない……巧が『溺愛』しているとか『許さない』とか……どこの義妹の話なんだ。

自分で自分の台詞に赤面する。

こういうやり方は好きではないが、巧が利用しろというならそうするのが一番だ。

なにかあれば巧に言う。絶対言う。後始末は全部彼にお任せする。

パチ、パチ、パチとやる気のない拍手に、真尋は振り返った。

「真尋、すごい！ 私の出る幕なかったね」

「結愛ーっ」

「ふふ、真尋『溺愛』されているんだー。まあ、そんな感じだよ」

「違う、違う、違うから！ あれはハツタリだから！」

「うん、でもそうしておいたほうがいいのかも。余計な嫉妬されるのも面倒でしょう？ 真尋が義理

の妹なのは本当なんだから」

真尋の言葉などさりと流して、結愛はにつこりほほ笑む。さらさらの黒髪を背中を下ろして

る結愛は、清楚可憐な皇華生の見本のようだ。

さつきまでの毒気が抜かれて、真尋は苦笑した。

「お昼食べよう」

「うん！」

その後、噂はうまい具合に広がったようで、それ以降皇華内で真尋がからまれることはなくなった。

* * *

高二秋――

「好きです。付き合ってください」

巧は告白してきた相手を見下ろした。この制服は巧が通う男子校の近くにある中学校の物だ。

彼女が中学三年生であるならば、巧とは二つ違うだけだが、中学生と高校生ではその差が大きい。そして女の子の数年は、それこそ随分違うものだ。

同じ高校生の女の子であればまだいいが、中学生はどんなに大人びていても子どもにしか見えない。自分も子どもでありながらそう感じる。

「中学生は相手にしないから」

そう一言だけ言つて彼女の横を通り過ぎた。

どこかで隠れて見ていたのか、泣きだした彼女を友人たちが慰めている。

改札を抜けると、先にホームに行つていた友人たちがにやにやしながら巧を待つていた。

「今度は中学生かよー、巧」

彼女たちが巧を捕まえられるのは、高校の正門かこの駅しかない。だからどうしてもこういう場面を誰かに見られることになる。友人たちは巧が呼び止められると「お疲れさん」と言つて置いていく。確かに巧は疲れていた。

「いつそ特定の誰かを作れば、告白も減るんじゃない？」

別の友人の提案に巧はだるそうに首を左右に振つた。

一度それで「特定の誰か」を作つたことがある。それはそれで結果的に別の意味で面倒になった。以来その手段は封印中だ。

「お、あれハンカチちゃんじゃねえ？」

「あ、本当だ」

彼らが言う「ハンカチちゃん」とは、さきほど告白してきた子と同じ中学の女の子だ。

巧の目の前で派手に転んだ彼女に、巧は手を差し出した。膝小僧をかなりすりむいて痛そうだったからハンカチを渡した。そのハンカチを律儀に洗濯して、アイロンまでかけて返しにきたのがハンカチちゃんだ。

名前を名乗つた気もするが巧は覚えていない。

友人たちとホームで電車待ちしている間に、ハンカチを返しにきたから彼らも覚えている。

恥ずかしさに泣きそうになりながら、でも懸命に「ありがとうございます」とハンカチを差し出されて受け取らないわけにもいかない。もとは自分のものだ。

ついでに連絡先を渡すなり、聞くなりしてくるかと思えば、彼女はそれが精いっぱいだったようで、そそくさと立ち去ってしまった。

以降、たまに遠くから視線を感じる。

今も友人たちの示す方向を見れば、彼女はぎよつとしたように慌てて、誰かのうしろに隠れた。

巧に近寄ってくる女の子は積極的な子が多かったため、想いを寄せながらも接近してこない彼女は逆に目立つ。

盾にされた女の子のほうは呆れた様子で、ハンカチちゃんを論し、ぶんぶん首を横に振る彼女を仕方なさげに見たあと、自分たちの視線から隠すように背中を向けた。

「かわいいなあハンカチちゃん、初心って感じ」

「お友達も優しいよなあ」

遠くから見るだけのハンカチちゃんと、それを見守るお友達は、巧たちの間でもほのぼのとした存在になっている。

幼さが抜けていないところや、かわいらしさが妹みたいに思えるらしい。

彼女たちはそんな印象を持たれているなど露ほども気づいていないだろうけれど。

「あのまんますくすく成長してほしいもんだ」

「そうそう」

その頃はまだ、そういう認識でしかなかった。

バレンタインデーに創立祭、学園祭、おおよそのイベント時に彼女たちを見かけていた。巧たちが気づいているなんて思いもしないのか、ある意味無邪気にか。

けれど、見かけるたびに印象が変化する。

ハンカチちゃんの髪は伸びて頭のとっぺんで揺ら揺らす。

お友達はぐんつと身長が伸びた。そして二人とも体つきが変わった。

きやあきやあ騒ぐでもなく、無遠慮に近づくでもなく、いつまでたってもひっそり見ているだけの彼女たちだったが、学園祭の時にトラブルに巻き込まれた。

そんな二人の存在に他の女の子たちが気づいて、文句を言い始めたのだ。

これには、正直巧も呆れざるを得なかった。

「あなたたちみたいに地味な子が巧さまの周囲をうろつかないで！」とかなんとかだ。

「巧さま」と呼ばれていることに気づいても、いつまでたってもその呼び名には慣れなかった。

彼女たちは自分のなを見ているのか、身近にいるアイドルかなにかだと思っている様子がひしひしと伝わる。

巧は基本、そういう騒ぎには無関心を貫いていて、その時も裏庭での騒ぎを生徒会室から眺めていた。

「この子はただ彼のが好きだけです。気持ちはおあなたたちと同じなんです。遠くから見るぐ

「はい許してもらえませんか？」

「女たちの、それも高校生の集団に囲まれて泣きそうになっていたハンカチちゃんをうしろに庇つて、頭を下げたのはそのお友達だった。」

彼女は声を荒らげるでもなく、ただ正直にハンカチちゃんの気持ちやどれだけ本物か代弁している。「一目見るだけで「元気になるんです」「それだけでいいんです」と当の本人としては恥ずかしいほどの台詞が並べ立てられる。」

そのうちなぜか彼女の言い分に共感して、「そうよね、巧さまを好きな気持ちは一緒よね」などと泣き出す女子高生まで出始めた。

事態を見守っていた生徒会連中は、にやにや笑うだけだったが。

凛とした立ち姿で、怯むことなく友人を守って、穏やかに事態を収束させた彼女に、巧は初めて興味を抱いた。

そしてそれから……二人が視界に入るたびに彼女を見てしまう。

くせのあるゆるやかな髪が肩についていくのを。

夏服から伸びるしなやかな手足を。

幼さをどんどん消していくその表情を。

父の再婚相手の家族との顔合わせで、遠くから見知ってきた彼女が目の前に現れた時の巧の驚愕など、彼女は知りもしないだろう。

父が再婚したいと切り出してきた時、巧は正直驚いていた。

湯浅製菓社長といえば華やかに聞こえるかもしれないが、代々続いてきた古い家には柵が多い。

父が社長に就任する前後もいざこざがあつて、親族関係のトラブルに巻き込まれた。そのため、繊細だった巧の母は耐えられずに病に倒れた。

母亡きあと、様々な思惑から周囲に再婚を勧められていたのに、父はそれを受けなかった。だからもう再婚はしないのだと思っていたのだ。

その父が、決断した。

「うるさい親族を抑えられるのか」「母の二の舞にならない自信はあるのか」「今度こそ守れるのか」——いろいろな言葉が渦巻いたけれど、巧はそれを口にはしなかった。

もうすぐ高校も卒業する。大学入学と同時に一人暮らしでもすれば同居もせずに済む。

なにより、親の人生と自分の人生は違う。

どんな女性を妻にしようと、父親が覚悟を決めた相手ならそれで構わない。その女性に子どもがいて、それが三つ下の女の子だと聞いても自分には関係ない。

そう思っていたのだ。

顔合わせの日までは。

「そう。知らせてくれてありがとう。引き続き注意してくれたら助かる」

真尋が皇華に入学してから数か月——

電話の向こうの人物に、くすくすとした笑い声とともに『了解しました。本当に義理の妹さんが

かわいくて仕方がないんですね』と言われる。

巧は特に反論もせず電話を切った。

電話の相手は皇華の三年生だ。生徒会時代に関わりがあったことと、友人の恋人ということで頼みやすかった。

こうして定期的に真尋の高校での様子を知らせてくれる。

真尋が入学した当初の噂は凄まじく、巧が眉をひそめるような内容のものもあった。

しかし真尋はそれについて一切愚痴ることはなかった。

義理の妹になったことは隠しようがない。

だから巧は自分の存在を隠すよりは、公にしたほうが真尋を守りやすいと思ったのだ。皇華に進学させたのは、やはり正解だ。あそこなら湯浅の名前も巧のコネも通用する。

「かわいくて仕方がない、ね」

確かに巧は、真尋が義理の妹になってからその台詞を便利に使っている。

『真尋は俺が守るから、千遥さんは父さんが守ってよ。俺は母さんの二の舞だけは嫌だ』

そう言った時、父は驚きと困惑を珍しく表情に出していた。言いたいことはいろいろあっただろうに、余計なことは口にせず『じゃあ、真尋ちゃんのことはおまえに任せよう』と言ってくれた。

こうして義理の妹を守ることを父に託された。

だから巧はそれを守っているにすぎない。

大学生になっても一人暮らしを始めないのも、できるだけ送迎をするのも、こうして高校生活を

気にかけるのも、見知っていた彼女が『妹』になったからだ。

巧は『妹』になる前から真尋のことを知っていた。

彼女も『兄』になる前から自分のことを知っていた。

けれど互いにその事実を口にしたことはない。

「実際はかわいげなんてないけどな」

直接顔を合わせた時から、真尋は警戒心丸出しで巧に接してきた。

『お兄さんになるなんて嬉しい』とかいう甘ったるい言葉は出てこないだろうとは、なんとなく思っていた。

けれど『以前からお見かけしていました』とか『お話しできて緊張します』ぐらいは言ってくるだろうと思っていたのに、彼女は『あなたの存在を初めて知りました』というような態度だったのだ。

そして、こうして家族になっても、一緒に暮らし始めても、真尋はどこか距離を置いている。

できたばかりの『兄』という存在に、甘えて擦り寄ることも、友人に自慢することもなく、むしろ迷惑そうにしている。

まるで懐かない猫のように――

だから構いたくなるのか、からかいたくなるのか。

マイナス感情はためらうことなく表情に出してむしろ素直なのに、嫌な目に遭っても、困ったことが起きても、そういうものは一切表に出してこない。

素直なのか素直じゃないのか。

「巧くん、まだ起きている？ お義父さんがケーキを買ってきたからみんなで食べようって」
階段を上がったスペースから真尋が叫んでいる。

彼女はなにを警戒しているのか、もしくは遠慮しているのか、巧の部屋にはできるだけ近づかないようにしている。そんな大声を出さずとも、部屋の前まで来て、ドアをノックして声をかけてくれればいいのに。

それに、ケーキなんか興味ない。

それは父だつてわかっている。

家族団らんの時間を設けるための、もしくは部屋にこもりがちな真尋を誘き出すためのただの口実。

巧は返事もせずに部屋を出た。

真尋が「あ、起きていたんだ」とぼそりと呟く。巧の姿を見て、階段を下りようとする彼女を巧は呼び止めた。

「真尋」

「なに？」

「大声で呼ぶな。部屋まで呼びに来い」

「……はい」

返事は素直だが表情は嫌そうだ。それにきつと、これから先も言った通りにはしない。

真尋は、お風呂から上がって部屋でくつろいでいたところに、父が帰ってきて呼ばれたのだろう。

ロングワンピースにカーディガンを羽織った姿は、色気もなければ見苦しくもない格好なのに、

巧の心を落ち着かなくさせる。

だから、手を伸ばして髪に触れた。

脇の下まで伸びた、明るい色のふわふわでやわらかな彼女の髪。

「髪、きちんと乾かしたのか？」

「乾かしたよ」

「少し冷たい」

「そう？」

髪を指に絡めて軽くひいた。それはさらりと指の間をくぐりぬけていく。

「真尋、もう少し髪伸ばせ」

「はい？」

(そうでなきゃ、すぐに逃げていく)

「おまえの髪、ふわふわ落ち着かないから伸ばしたほうがいい」

「はい、はい、すみませんね。ぼさぼさで」

「ぼさぼさなんて言っちゃダメ」

真尋は少しむっとしたように、先に階段を下りていく。

背中に揺れる髪。無防備な背中。そこはかとなくわかる体のライン。

高校生になったばかりの、まだあどけなさを残す彼女に、抱くべきではない衝動がある。巧はそれを自覚している。

(家を出るか……)

元々、大学入学と同時に一人暮らしをする予定だった。祖父からも入学祝いと称して、大学に近い場所にマンションの一室をもらった。

税金対策と投資を兼ねて購入した物件で、いつでも生活できるようにすべてが整っているし、実際、巧の住民票はすでに異動してある。

母が結婚しても別居を希望していた真尋を同居に促した責任と、義理の母になった千遥への気遣いで、しばらくは家族ごっこをしてもいいだろうと考え、独立を延期していたにすぎない。

いや、本音はもつといるるな彼女を見てみたかったから。

高校の制服姿。

少しおとなしめの私服姿。

ラフな部屋着姿で、一緒に食事をして、リラックスしてテレビを見て、同じ空間で過ごしてみたかった。

「父さんお帰り」

ダイニングにつくと、千遥が紅茶を淹れて、真尋がケーキをお皿に取り分けていた。

お手伝いの頼子は帰ったのだろう。

父も千遥も仕事が不規則だから、こうして家族が集まる機会は実はあまりない。

だからか、真尋の表情がいつもよりもふんわり緩んでいる。

十五歳の少女らしいあどけなさが垣間見えると、巧の心にも温かなものが灯る。

(だから、もう少し……)

義理だとしても、家族という関係の中で少しずつ気を許して安堵しつつある真尋の姿を、もう少しだけ見守っていききたいとも思うのだ。

「巧くんはどのケーキがいいの？」

「おまえは？」

「私？ 私はチョコプレートかイチゴかなあ」

「だったらイチゴをもらう」

「え？ なんで？ 普通は他のキャラメルとか抹茶とかから選ぶところでしょう！」

「俺は今イチゴの気分だ。おまえはチョコプレートにすれば？」

「うー、そうだけど！」

「真尋ちゃん！ 今度は巧にとられなくて済むように、二つずつケーキを買ってくるよ！」

父がまた馬鹿っぽいことを言い出して巧は呆れた。

真尋も「え？ そこまでしなくていいよ」と怖気づいている。

千遥や真尋と暮らし始めて知った父の新たな面が、この『馬鹿っぽさ』だ。正直あまりこんな一面は知りたくなかった。

「巧にいじわるされたらすぐに言うんだよ、真尋ちゃん」

たかがケーキ選びのどこが意地悪なんだと思えば、父は意味深な眼差しで巧を一瞥した。どうやらいろいろな見抜かれているらしいけれど、隠す気もないので無視をする。

(もう少し、あなたにつき合ってやるよ)

父の望んだ家族ごっこ。

それは真尋の心の奥底に隠れていた望みでもある。

巧は椅子に座ると目の前のイチゴのケーキを見た。向かいに座る真尋の前にはチョコレートケーキがある。

「真尋」

巧はケーキの上ののつていたイチゴをへたごとつまむと、真尋の唇に押し付けた。

「イチゴだけはおまえにやるよ」

真尋は驚きに目を見開きつつ、押し付けられたイチゴを受け入れようと、反射的に口をあけた。

へたを掴んだままできると、ぎりぎりのところを真尋は噛む。指先に彼女のやわらかな唇の感触が伝わった。

「巧……フォークを使いなさい」

父は一瞬声を荒らげかけて、なんとか押しどめたようだ。

真尋は「いきなりはやめてよっ」ともごもごさせて言うだけだし、千遥は「あらあら」と気にも留めない。

「はい、父さん」

巧は素直にそう言うと、フォークを手にした。

指先に残ったやわらかな感触を記憶に留めながら。

* * *

真尋が高校二年になる時に、巧は家を出た。

大学と一族が経営する会社の中間にあたる場所ですら一人暮らしを始めたのだ。

聞けば、大学入学と同時に元々そうするつもりだったらしい。親たちの結婚が決まって延期することにしたようだが、真尋にしてみれば、だったら初めからそうすれば良かったのにとと思う。

真尋は祖父母の元で生活し、巧は独立する。

そうすれば母たちは二人きりの新生活を送れたはずだ。

『顔合わせの日に、同居が当たり前だみたいなことを言わなければ、早く一人暮らしできたんじゃないの?』と、引越した日にばやいたところ、巧は真尋の髪を一房掴んで軽くひっぱりながらほざいた。

『家族になったんだ。少しぐらい一緒に生活して家族らしく過ごすのも悪くなかっただろう?』と。なにかとこの男は真尋の髪をいのように扱う。背中の真ん中まで伸びた髪は、すぐに巧のおもちゃにされてしまう。

同居生活はたった一年。

家族らしく過ごせたのだろうか。真尋にはよくわからない。

けれど巧が家を出ていくことを、少し寂しいと思ったのは彼には内緒だ。

そうして、真尋の送迎も運転手の園部がするようになり、巧は気が向いた時にだけふらりと迎えに来るようになった。

そして今日も、巧の気まぐれが発動されたようだ。いつもの辺鄙な第五駐車場に向かうにつれて、なんとなく騒がしいと思えば、一台の車に人だかりができていた。

巧の愛車の黄色い車は小さすぎてその人混みに埋もれている。

巧が迎えに来ると、結愛は必ず『じゃあね、真尋』とにこやかにするりと去っていく。まるで余計なものを感知したくないようで、喧騒の中に真尋を放置するのだ。

去年の夏休みが明けてから、結愛はぐんつと雰囲気を変えてしまった。

その理由については触れられたくない様子だったからずっと見守ってきたため、真相を知ったのはつい最近だ。

真尋はまっすぐな黒髪が翻るその背中を見送ると、勇気を出して一步を踏み出した。

巧が真尋の存在に気づいて顔を上げる。

「真尋」

と、どこから出しているのかわからない甘ったるい声で名前を呼んできた。

それを聞くと『ああ、せっかくの巧さまとの時間が終わっちゃった』と責める周囲の女の子たちの冷たい空気がびしびし突き刺さってくる。

けれど彼女たちは分をわきまえて、さあつと蜘蛛の子を散らすように去っていった。

「だから、迎えに来るなら来るって知らせて！」

「知らせたらおまえ、結愛ちゃんの手で帰ろうとするだろうか」

「どうやら気づかれていたらしい。」

『巧さんがお迎えに行きますので』と園部から連絡があった時に『今日は結愛と試験勉強して、そのまま送ってもらおうから』と言って、お迎えを何度か断ったことがある。

そのせいか、今度は巧がお迎えに来るかどうかわからなくなった。

おかげで最近、駐車場に行かないと誰が迎えに来ているのかわからない状況だ。

真尋は仕方なく助手席に座ると眉をひそめた。久しぶりに乗る巧の車は……なにか匂いがする。

「巧くん……煙草吸い始めたの？」

「悪い。匂い残っているか？ 俺じゃなくて先輩のだ」

「そう、なんだ」

巧はこの間二十歳を迎えた。

だからだろうか。

彼がどんどん大人になっているのを感じる。

ハンドルを握る骨ばった手も、広い肩幅も、少しずつ変わる髪型も、運転中の横顔も。

高校生だった巧を知っているからこそ、あの頃の少年っぽさが消えてなくなり、大人の男の雰囲気を感じるようになった。

隣に座ると落ち着かない気分になるのは、そのせいなのだろう。
小さな車の狭い空間は、否応なしに互いの距離を近づけるから。

今日は煙草の匂いだったけれど、いつかここに香水の匂いが残るのかもしれない。
不意にそう思った。

巧の女性関係など、これまで気にしたことはなかった。

たとえば、今真尋が座っている助手席に、他の誰かが座ったとしても、それが恋人だったとしても。

でも煙草の匂いの代わりに、香水の匂いなんかしたらきつと、真尋はこの車に乗るのが嫌になる気がする。

そしてそう感じた自分にびっくりした。

「真尋？ どうかしたか？」

「え？ ううん、なんでも——」

今日は進路指導の話があつたばかりだ。

皇華は大学部があるので、ほとんどの生徒はそのまま進学する。けれど、他大学や留学を希望する場合や、逆に進学を希望しない場合などは早めに知らせるようにと言われた。

その時に、婚約者がいる人は相手の方ともよく相談して進路を決めるように、と付け加えられたのだ。

真尋は元が一般家庭の娘なので、高校生で『婚約』なんてあるのかとびっくりしたが、皇華では

あたりまえのことだったらしい。

変な男に捕まる前にといい思惑や、親の会社の関係などで、実際一部の女子生徒はすでに『婚約』をしていると知った。

実は表だって言えないが、結愛にも『婚約者』がいることを最近知ったばかりだった。

進路の話から『婚約』の言葉が出たせいで、そのあとの教室はそういった噂話で持ちきりだったのだ。

そしてそこでクラスメートに言われた。

『巧さまは、ご婚約のお話はないの？』と。

真尋は反射的に『知らないし、聞いたこともない』と答えた。
すると、彼女たちは親切っぽく真尋にいろいろ教えてくれた。

成人を迎えて、巧が会社関係のパーティーに顔を出し始めたこと。巧の相手が誰になるか周囲は興味津々であること。どこかのご令嬢が狙っているらしいことなど——

巧が会社関係の催しに参加し始めたことは知っていた。父親の手伝いと社会勉強を兼ねて大学と会社を歩き来している。それもあって一人暮らしを始めたのだ。

巧の『婚約者』どころか『恋人』の有無さえ真尋は知らない。

女除けのために『義妹溺愛』を演じていたし、家族になってから女の気配など感じたことがない。
今は？

真尋が知らないだけで本当は、自分が今座っているこの場所に……女性が座ったりしているのだ

すぐ近くに巧の目があった。いつも飄々として涼やかな眼差しが、今は熱を孕んで見える。

「特、別……？」

「ああ」

巧の指に絡む自分の髪。髪に感覚なんてないのに、彼が触れるそこから伝わるものがある。

「私が、妹だから？」

そう巧が『特別』だと言うのは、自分が『妹』になったからだ。

この車に乗せるのは送迎のためだ。だから自分だけが座ることのできる席。

「妹じゃない。妹にはしない」

巧はそう言うと、真尋の髪をぎゅっと握り締める。

目を伏せて拳を唇に近づけた後、巧はおもむろに真尋の髪を手放した。

* * *

真尋は最近自分の中に生まれはじめた感情に『名前』をつけていいのかわからなかった。

『名前』をつけてしまえば、後戻りできない気がして、『後戻り』ってなんだろうと考える。

『妹』になったから、彼の近くにいます。

『妹』になったから、名前を呼ばれて話をするができる。

『妹』になったから、家族になったから、『特別扱い』されている。

ただそれだけのはずなのに、どうしてこんな複雑な感情が芽生えてしまったのか。

『義理の兄』だから抱いた感情？

『義理の妹』だから許される感情？

その時、スマホが震えて真尋は画面を見る。

一緒にお昼ご飯を食べていた結愛が「巧さんから？」と言った。

「え？」

「今の、巧さんからでしょうか？もしかして久しぶりのお迎え？」

「ああ、うん。そうみたい」

結愛の言う通り、メッセージは巧からで学校に迎えに来るという内容だ。けれどどうしてわかったのだろう、と首をかしげると結愛がふわりと笑った。

「わかるよ。真尋の表情が変わるもの。もしかして会うのも久しぶりなの？」

「……うん、そうかも」

結愛がにこにこ笑っている。いつもならかわいい笑みなのに、今はなんだか居心地が悪い。

結愛の言う通り、巧に会うこと自体が久しぶりだった。

会社の手伝いを始めた時から、もしかしたらと予想はしていたけれど、巧は正式に湯浅製菓を継ぐことを表明した。

よって大学卒業後の就職先は、そのまま湯浅製菓となる。

それですますます大学と会社の研修との両立で忙しくなったようで、実家に帰ってくることも少な

くなつたし、家族のイベントごと欠席するようになった。

当然お迎えも遠のいている。

真尋としては、巧がお迎えに来ると騒ぎになるのでむしろ来ないほうが望ましい。けれど実際に来なくなると、なぜか皇華内では巧が義理の妹への興味を失つたと思われるようになった。

真尋は『忙しいのであれば無理に迎えに来なくてもいい』と返事をしたのに、すぐさま『余計なことは考えるな』と返ってきた。

『会いたい』と思う気持ちと『会いたくない』と思う気持ち。

どちらを抱いても、その理由を考えると嫌な答えにたどりついてしまう。

だから巧のメッセージ通り、真尋は考えることを放棄した。

「私も会いに行こうかなあ」

結愛がぼつりと呟く。

「婚約者？」

結愛の婚約者はずっと留学していて、そのまま海外勤務となった。

中学生まで結愛は、夏休みなどの長期休みごとに婚約者の留学先に滞在していたらしい。だから彼女の英会話能力はかなり高い。今は様々な資格試験に取り組んで勉強強している。

「うん。お仕事が忙しくなければ会いに行きたいけど、邪魔もしたくないし」

「かなり年上だっけ？」

「うん、兄の颯真さとうまくんと同じ十歳上……」

「日本に帰ってくる予定はあるの？」

「わからない。帰ってくる気がないかもって思うことがあるの。そのうち私があきらめて婚約解消を言い出すの、待っているのかなあって」

結愛はあまり自分の婚約について話さない。公おおびにできない事情があるようで、結愛に婚約者がいることは誰も知らないようだ。

だから、こうして話すのは珍しい。

「駿くんは自分からは絶対婚約解消しないって言うの。私が二十歳になるまでに自由に決めていいって。年の差があるし、私が大人になるのを待ってくれているんだと思っていたけど、むしろ私からの婚約解消を望んでいるのかもしれない」

「結愛は……解消したくないの？」

「え？」

「だって、幼い頃に決められたことでしょうか？ 解消していいって言うのは、別の人を探すチャンスをくれるってことじゃないの？」

真尋には三歳年上の巧でさえ大人に感じてしまう。十歳も年上ならなおさら恋愛対象にもならない。結愛はかわいい。

十歳も年上のオジサンなんか選ばずとも、年相応の相手との出会いを求めたっていいはずだ。

「真尋……私、駿くんが大好きなの。だから婚約解消なんてしないよ。解消したほうが駿くんのだ

めかもしれない。私もしない。婚約って鎖で縛っているのは多分私のほう……ふさわしくないことはわかっているんだけどね」

「ごめん、余計なこと言った」

最後の彼女の台詞で真尋は失言を悟る。

結愛の婚約者は高遠グループの御曹司、結愛自身も矢内家のお嬢さまのはずだった。

けれど高校一年の夏……彼女は自分が矢内家の養女であることを知った。矢内家の養女として居続けるために、高遠駿が婚約してくれたことを知ったのだ。

「ううん、大丈夫。だから真尋の気持ちも少しはわかるよ……」

後半小さく呟いたあと、結愛は「真尋のお弁当の肉巻きちようだい」なんて言って、話題を変えた。

勘のいいこの友人は、真尋自身よりきつと、いろんなものが見えているに違いない。

それをはつきりさせないでいてくれることに、真尋は心の中で感謝した。

お迎えなのだから、巧の役目は真尋を家に送り届けることだ。けれど今、真尋は巧の車の助手席から、夕闇に沈みかけている観覧車を見ていたりする。

「少しドライブに付き合え」と言って、連れてこられたのは海辺の駐車場。

だんだんと街がライトアップされて、夜景の美しいデートスポットになるに違いない。巧は無言で変化していく景色をぼんやり見ている。

「なんだか疲れているね」

「そうだな。疲れている。だからおまえに癒されようと思って」

顎のラインが鋭くなった。疲労は滲んでいるものの、その目には力が宿っている。

巧が急激に大人になっているようで、制服姿の自分ますます子どもっぽく思える。

「真尋」

手が伸びて巧がいつものように真尋の髪に触れようとした。

だが、なぜか咄嗟にその手を振り払った。

ぱちんつと軽い音がして、巧の目が大きく見開かれる。

「あいつ、えつと」

今まで平気で触らせていたくせに、今さら抵抗するなんて、意識していますと暴露しているようなものだ。

だって今日の巧はスーツ姿なのだ。

わずかに緩んでいるもののネクタイをして、上着を着て、そして嗅いだことのない男っぽい匂いがして、久しぶりに会うせいで知らない人みたいに見える。

巧は目元を緩めるとふわりと笑みを浮かべる。皮肉な笑みではなく素の優しいほほ笑み。

「少しは情緒が育ったか？」

からかうような口調。

情緒ってなんだ？ と一瞬意味がわからなくて真尋は混乱する。

「意識してほしいとは思っていたが、いざ意識されると……まずいな」
「なに、言ってる」

「いい。今はわからなくて、まだ気づかなくていい。父さんからはおまえが二十歳になるまでは手を出さなつて厳命されている。だからわからないままでもいい」

巧の言っていることがわからなかった。いや、言葉の内容はわかる。でもわかりたくない。父さんについて言つて、二十歳について言つて、手を出さなつて——それはまるで。

「父さんには俺の意志は伝えた。いろいろ条件を出されたけれど、それをクリアすればいいつて許可も得ている。おまえが二十歳になるまでは家族でいる、妹として扱ってさ」

巧には以前から『特別』なのだと言われ続けてきた。

自惚れでもなんでもなく、真尋はきつとこの世の中で一番巧に近い女の子だ。

心臓がどきどきしている。くやしいくらい巧のあやふやな言動に翻弄ほんろうされている。

反射的に首を左右に振つたのは、わかりたくないというささやかな意思表示。

「妹として扱う。でもおまえは妹じゃない」

「巧、く……ん」

「わかつている。おまえが戸惑っているのは——でも俺にとつておまえは最初から妹じゃない」
義理の兄になる前から巧を知っていた。友人の片想いの相手としてずっと巧を見てきた。

だから不意に見せる彼の優しい部分も知っている。

ぎゃあぎゃあ泣いていた迷子の子どもの世話をしたり、階段で立ち往生ちゅうじやうしていたベビーカーを持

ち上げるのを手伝つたり、女の子たちが勝手にトラブルつていれば、声をかけて空気を変えたりしていた。
いい奴なんだ、と思つていた。だから友人の片想いを応援していた。

真尋にとつても最初から、巧は兄じゃない。

「妹なんかにはしない」

熱を孕はらんだ眼差しその奥にあるものは、真尋の心を揺り動かすには十分で、そしてそこから視線をそらすことができない。

やるせない表情で口元を歪ゆがめると、巧は再度真尋の髪に手を伸ばした。

真尋も今度は拒まなかった。

大事そうに包み込むと、巧はそこにキスを落とす。

息の仕方でも忘れそうなほど苦しい感情があることを、真尋はその時初めて知った。

* * *

『二十歳まで』

それは偶然にも、結愛も口にしていた言葉だ。

巧も真尋に『二十歳まで』だと言いつ聞かせる。

高等部卒業後、真尋は皇華の大学部の看護科に進学した。

結愛は何度勧めても進学を選ばず、婚約者の実家で花嫁修業をする道を選んだ。巧は大学卒業後、予定通り湯浅製薬に入社した。身分も、いずれ後継者になることも隠さずに。巧との距離は変わらなかった。

家族としてふるまいながら、妹として扱いながら、二人きりになると『妹じゃない』と念を押す。大学入学と同時に髪をばつさり切った時、ものすごく睨まれ『二十歳になったら覚えていろ』と捨て台詞を吐かれた。

年を重ねるごとに、真尋の中に降り積もる感情がある。

雪のように溶けてなくなってしまうばいばいのに、それは厚みを増していくばかりだ。

巧と二人きりの時間は、息苦しくてたまらないのに、彼が与える熱の中に身を委ねたくなくなる。見つめてくる眼差しから目をそらせない。

一定の距離を保ちながらも触れてくる手を拒めない。

従いたくもない彼の言葉を無視できない。

『余計なことを考えるな』と言われるたびに、彼の命令通り考えることを放棄した。

『二十歳まで』と彼が与えてくれた猶予の中で、自分自身の答えを何度も見詰め返した。

迷い、悩み、惑い、苦しみ——それでもなぜか未来を信じずにはいられなかった。

けれど同時に、現実が見えてくる。

知りたくもないのに、気づいてしまう。

真尋が二十歳になるまであと少しという時に、異例ともいえる巧の海外赴任が決まった。

「真尋……おまえとの約束を果たすのは二年延期になった。でも必ず結果を残して帰ってくる」

くやしげに呟く巧に、真尋はなにも答えられなかった。

一人、見送りに行った空港で『余計なことを考えずに俺の帰りを待っている』、そう命じて初めて彼の唇が真尋の唇に触れた時——深く自覚した。

巧の心と自分の本音に。

誤魔化しようもないほど、否定できないほど、彼に溺れていることを。

第二章 赤の他人

真尋が勤めているのは、西園寺グループ系列の総合病院だ。西園寺グループは病院や老人ホーム、幼稚園や保育園などをはじめ様々な施設を運営している。

そこを選んだのは、看護実習でお世話になったこと、世間では縮小傾向にある小児科の入院病棟があり、重症患者も受け入れていること、そして母の弟である叔父が小児科部長をしていることからだ。

叔父に押し切られた部分もあるが、本音を言えば、湯浅系列の病院でなければどこでも良かった。「椎名さん！」